

申請者：Dilfuza M. Kasimova

論文題目 明治期における郵便汽船三菱会社の経営システムの発展

審査員 挽 文子

尾畑 裕

橘川武郎

本論文は、日本の管理会計の発展過程を理論化するための一つの事例を提供することを企図し、1870 年から 1885 年の郵便汽船三菱会社を対象として、同社の経営システム（組織と会計）の発展過程を経営システム導入の背景との関係を踏まえて考察している。

筆者によれば、同社では、まず複式簿記を核とした経営システムが本社中心に展開された。しかし、1874 年の政変と政府の海運業保護に対する目的の変更により価格競争が激化すると、大口貨主との一手積約定に基づく不定期運航が定期運航に代わり、支社の集貨能力が経営上重要な意味をもつようになった。これが、損益単位の変更（船から支社へ）、ならびに 1881 年の予算の導入をもたらした。各地の現場情報や運賃収入情報に対して支社に頼ることが多かったため、なかでも支社の収益管理に力が注がれた。かくしてこの時期に各支社の帳簿・勘定が統一され、複式簿記は本社だけではなく、全社的に展開されるようになった。

本論文の長所は次のとおりである。第 1 に、「管理会計実務の歴史は、複式簿記が経営システムとして利用されたときから始まる」という立場に立脚した、日本企業を対象とした実証研究は極めて少ない。日本の管理会計を検討するに当たって、その始まりから見ようとする姿勢は評価できる。第 2 に、三菱資料館所蔵の第 1 次資料および『三菱社誌』等を丹念に当たり、経営システム導入の背景・目的を明確に考慮したうえで、複式簿記を中心とした会計システムのみならず、組織構造やその他の管理システムをも含めた経営システムの発展を分析した点である。第 3 に、会計システムについてはその計算技術的側面というよりもそれが果たす役割、筆者によればその活きた機能の側面に焦点を当てた点である。

このように優れた点がある本論文にも、指摘すべき問題点がある。第 1 に、日本の管理会計とは何かについて、その定義や内容が必ずしも明確でないことである。第 2 に、本文および補遺にも豊富な資料が掲載されているが、それらの活きた機能の側面が明確に記述されているとは言い難い点である。しかしながら、これらは本書の長所を損なうものではなく、また筆者自身も問題点を認識しているため、筆者の今後の研究により克服が可能である。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第 5 条第 1 項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。